



CDL のバックアップと復元

この章では、CDL のバックアップと復元の操作手順について説明します。

- [CDL Ops-Center の設定へのアクセス](#) (1 ページ)
- [バックアップと復元](#) (2 ページ)

CDL Ops-Center の設定へのアクセス

次の手順を使用して、CDL API 設定にアクセスします。

始める前に

CDL API を設定するために、CDL データストアが設定されていることを確認します。

手順

ステップ 1 `cdl api deploy true` コマンドを使用して、CDL API ポッドの展開を有効にします。

デフォルトでは、ポッドの展開は無効になっています。

ステップ 2 次のコマンドを使用して、CDL API ポッドを垂直方向にスケーリングします。

a) `cdl api cpu-limit cpu_limit` コマンドを使用して、最大 CPU 制限を設定します。

例 :

```
cdl api cpu-limit 2000
```

cpu_limit は 1000 ~ 8000 の範囲の整数である必要があります。デフォルト : 4000。

b) `cdl api go-max-procs cpu_cores` コマンドを使用して、CPU コアの最大数を設定します。

例 :

```
cdl api go-max-procs 4
```

cpu_cores は 1 ~ 32 の範囲の整数である必要があります。デフォルト : 4。

- c) **cdl api memory-limit** *memory_limit* コマンドを使用して、許可される最大メモリを Gi 単位で設定します。

例：

```
cdl api memory-limit 6
```

memory_limit は 1 ～ 8 の範囲の整数である必要があります。デフォルト：4。

- d) **cdl api storage** *storage_size* コマンドを使用して、バックアップストレージを GB 単位で設定します。

例：

```
cdl api storage 90
```

storage_size は 1 ～ 200 の範囲の整数である必要があります。デフォルト：90。

バックアップと復元

バックアッププロセスをトリガーして復元するには、次の手順を実行します。

始める前に

cdl actions backup および **cdl actions restore** コマンドにアクセスするように **cdl api deploy true** を設定していることを確認します。

手順

ステップ 1 **cdl actions backup start** [**concurrency-factor** *concurrency_factor* | **created-before** *timestamp* | **slice-name** *slice_name*] コマンドを使用して、バックアッププロセスをトリガーします。

このコマンドはバックアッププロセスをトリガーしますが、プロセスが完了するまで待機はしません。作成されたダンプファイル名とともに成功または失敗のメッセージを返します。バックアッププロセスが完了すると、復元プロセスのために出力のダンプファイルを収集または参照できます。このファイルは、**cdl-api-0** ポッドを実行しているノードの `/data/<namespace>/data-cdl-api-0/<file-name.dump>` に配置できます。

このコマンドを実行すると、これにより **CDL** バックアッププロセスがトリガーされます。よろしいですか? という警告が表示されます。**yes** と入力して、**CDL** バックアッププロセスのトリガーを続行します。

次のパラメータは、**backup start** コマンドで設定されるオプションです。

- **concurrency-factor** *concurrency_factor* : スロットから同時にデータを取得することによってバックアップを取ります。デフォルトでは、一度にクエリされるスロットは 1 つだけです。

concurrency_factor は、1 ～ 8 の範囲の整数である必要があります。

- **created-before** *timestamp* : このタイムスタンプより前に作成されたレコードのバックアップを取ります。タイムスタンプは `CCYY-MM-DDTHH:MM:SS` 形式にする必要があります。

デフォルトでは、使用可能なすべてのデータがバックアップのためにクエリされます。

- **slice-name** *slice_name* : 指定したスライス名のバックアップを取ります。ここでは、設定したスライス名のみ渡すことができます。

デフォルトでは、すべてのスライス名のバックアップを取ります。

ステップ 2 **cdl actions backup status** コマンドを実行してバックアッププロセスのステータスを確認します。

このコマンドは、次のいずれかのステータスを返します。

- **idle | completed** : CDL バックアッププロセスが完了した、または進行中ではない
- **in-progress** : CDL バックアッププロセスが進行中である

ステップ 3 **cdl actions restore start file filename** コマンドを使用して、復元プロセスをトリガーします。

このコマンドは復元プロセスをトリガーしますが、プロセスが完了するまで待機はしません。成功または失敗のメッセージが返されます。このコマンドでは、**file** パラメータの設定が必須です。

このコマンドを実行すると、これにより **CDL** 復元プロセスがトリガーされ、既存のデータが上書きされます。よろしいですか？という警告が表示されます。**yes** と入力して、CDL 復元プロセスのトリガーを続行します。

ファイル名には **.dump** 拡張子が付いている必要があります。ファイルは、**cdl-api-0** ポッドを実行しているノードの、ホストパス **/data/<namespace>/data-cdl-api-0/<file-name.dump>** に存在する必要があります。

ステップ 4 **cdl actions restore status** コマンドを実行して復元プロセスのステータスを確認します。

このコマンドは、次のいずれかのステータスを返します。

- **idle | completed** : CDL 復元プロセスが完了した、または進行中ではない
- **in-progress** : CDL 復元プロセスが進行中である

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。